

阪神大震災20年

悼む 悲しみと生きるため

敗戦から50年後に起きた阪神大震災は、現代人が享受する都市文明のもろさを露呈させた。同時に、人文学者たちは、人間が作り上げた文化を考察する学問の無力感を痛感したはずだ。無念さを抱えながら、学者たちは実践的な研究に乗り出した。

(木須井麻子)

人文学の現場から

昨年12月中旬、龍谷大(京都市下京区)で、「臨床宗教師」の研修を受講する大学院生6人が、鍋島直樹教授(55)(真宗学)を囲んだ。語り合ったのは、同年5月、実習で訪れた東日本大震災の被災地での体験だ。

「追悼巡礼をしていると、沿道の人が手を合わせてくれた。宗教者の役割について考えさせられた」「被災者の傾聴活動で、相手の悲嘆を丸ごと受け止めることは、すくなく難しかった」

大学院生は僧侶でもある。研修を通して、死別を体験した人らの心のケアを学び、将来は災害地や病院などでの活動を目標とする。困難な課題と向き合う若者たちを前に、鍋島さんは「解決がつかない問題

東北大・龍谷大合同の臨床宗教師研修で、東日本大震災の犠牲者を追悼する学生ら(遺影を抱いているのが鍋島教授。2014年5月、宮城県石巻市で。龍谷大提供)



を抱える相手のそばに居続ける覚悟ができたなら、研修は終わりです」と励ます。

鍋島さんは、JR神戸線元町駅近くの「真覚寺」(神戸市中央区)の副住職だ。阪神大震災で建物は半壊。市内の門徒2人が家屋の倒壊で亡くなっ

たが、混乱で安否が確認できず、葬儀に駆けつけられなかった。「自分も怖くて、十分動けなかった。無念だった」

計8人の門徒が、被災が原因で亡くなった。諸行無常の光景に打ちのめされ、「悲しみに沈む人たちに、どう寄り

臨床宗教師 2012年4月、東北大が、布教や伝道を目的とせず、心のケアを実践する専門家と位置づけ、養成講座を開設した。東日本大震災の被災地で、

んが中心になって、龍谷大でも、14年度に西日本初の研修を開講。同年度に鶴見大、15年度に高野山大、種智院大が同様の講座を開講する。

講座を受講した鍋島さんが中心になって、龍谷大でも、14年度に西日本初の研修を開講。同年度に鶴見大、15年度に高野山大、種智院大が同様の講座を開講する。

諸行無常の光景 僧侶として行動

大規模な事故や災害が起きると、行動を起こさずにはいられなくなっていく。2005年のJR福知山線の脱線事故で亡くなった学生の遺族に寄せ書きを届け、07年の新潟県中越沖地震では義援金を募った。

そして、2011年の東日本大震災。「今度は支える側になりたい」という思いが、おのずと湧き、発生の約1か月後、被災地へ。仙台市で炊き出しやがれき撤去に加わり、「遺体安置所で、僧侶として手を合わせたい」と申し出た。身元不明の遺体に誦経すると、警察官らが駆けつけ、ほっとした表情を見せた。寺院の外であつても、「誰かの心の支えになれた」という。

宮城県南三陸町の避難所では、支援物資と一緒に、『死別の悲しみと生きる』を配布。受け取った被災者の依頼で、津波の犠牲者らの追悼法要を営み、遺族の傾聴活動に取り組んでいる。神戸と東北の往復は23回。鍋島さんは「遺族は深い悲しみの中で、『生き残った者の役割は何か』と悩みながら、生き抜くこととして、いる。彼らを支えるつもりで、逆に教えられる。尊い話を、臨床宗教師を志す学生に伝えたい」と語る。それが、二つの大震災を経た自らの役割だと自覚して。